



郵便を結束させるためには正確な時間を知る必要があり、郵便創業当初は日時計や和時計などが利用されたと考えられます。

西洋式の時計は、東京郵便役所には開局時から1台設置されていましたが、一般の郵便局は、明治6年10月に東京府下の郵便仮役所16局に配備されたのが最初のようなようです。明治7年6月頃には、この写真のような八角時計が、各地の郵便役所や郵便取扱所に1,000個ほど交付されました。

当時、ほとんどの職員は時計の使い方を知らなかったため、その取扱方法を詳しく記入した「時計用法」という解説書が配布されました。

このように、まだ時計は珍しい存在であったため、郵便局に時計が掛けられると町の話題となり、遠くからこれを見にくる人もいたようです。

(表紙解説)

東海道五拾三次之内 保土ヶ谷 新町橋

帷子川に架かる新町橋(帷子橋)の手前から保土谷宿の家並みを望む風景が描かれている。深網笠をかぶり尺八を持つ虚無僧や揃いの法被を着た駕籠かき、両懸を担ぐ人足が橋を渡っている。宿入口に二八蕎麦の看板が見える。蕎麦の値段は十六文だろうか。